

第1章 中津市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置

中津市は大分県の北西部に位置し、東は宇佐市、南西は玖珠町・日田市、北西は福岡県（添田町・みやこ町・築上町・豊前市・吉富町・上毛町）に接し、北東は周防灘に面しています。東西32.8km、南北30.0km、総面積491.44km²で、大分県の面積の7.7%を占めています。県都大分市までは71km、北九州市へは52kmの距離にあり、県北地域の中核的な都市として位置づけられています。



《図4：大分県における中津市の位置》

(2) 地形・地質

()内のアルファベットは、図5中津市の地質を参照

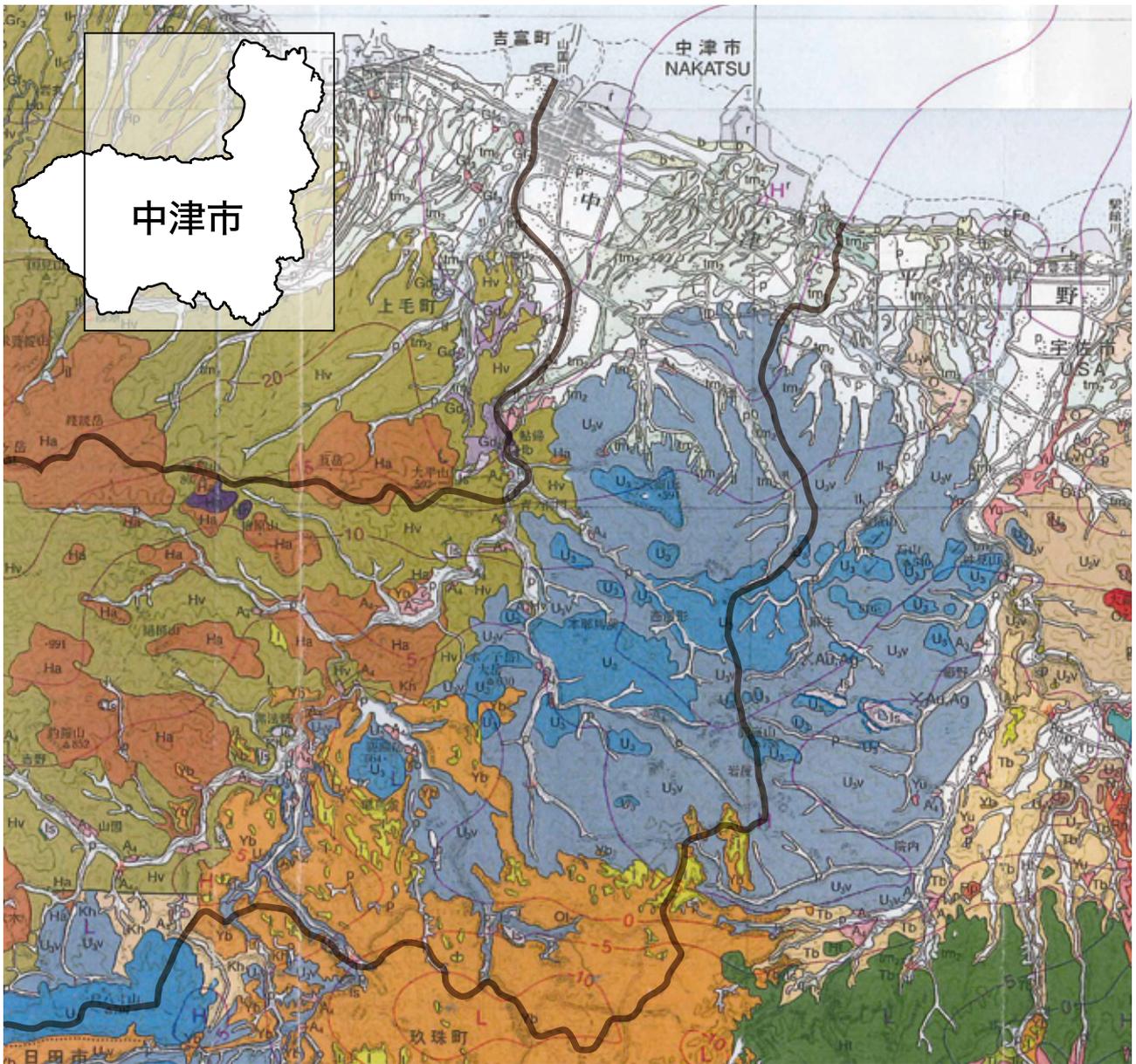
市域の77%は森林が占め、山国川下流の沖積平野部にまとまった農地が開けます。海に面した旧中津市と南に並ぶ三光の部分は東西幅が狭く、山間部は東から西へ、本耶馬溪町、耶馬溪町、山国町が広がります。西に英彦山ひこさんがそびえ、英彦山を源流とする山国川（一級河川）が市域を貫いて流れ、市の北端で周防灘に注ぎます。

山間部の地形は、幾たびもの火山活動によって形成された溶岩及び火砕流台地と、その台地が川による浸食や風化作用等でできた谷によって構成され、それらが傑出した景観の基礎をなしています。市内で一番古い基盤岩は後期白亜紀（約9千万年前）の花崗岩類（Gd2）で、三光土田の牛ノ首周辺で見ることができます。この基盤層の上に後期中新世から前期鮮新世（570万年～350万年前）の英彦山火山岩類と前期鮮新世から後期鮮新世（390万年～290万年前）の新时期宇佐火山岩類が覆い、更にその上に耶馬溪火砕流堆積物（100万年前）や今市火砕流堆積物（90万年前）、阿蘇4火砕流堆積物（約9万年前）等が堆積しています。

英彦山火山岩類は主に山国川左岸流域に分布し、安山岩ーデイサイト溶岩（Ha）や同質の火山碎屑岩（Hv）等から成ります。過去、この岩類は宇佐層群や耶馬溪層・耶馬溪火山岩類と呼ばれていたもので、きょうしゅうほう てきひつぼう さるとびせんつぼきょう競秀峰や擲筆峰、猿飛千壺峡（火山碎屑岩が強く変質（緑泥石化）している）などの景観を造っています。耶馬溪層や筑紫溶岩と呼ばれていた新时期宇佐火山岩類は、以前、宇佐層群や耶馬溪層と呼ばれていた層類で、山国川右岸流域に分布し、同じく安山岩ーデイサイト溶岩（U3）や同質の火山碎屑岩（U3v）等から成り、はちめんざん きのこだけ八面山や木ノ子岳、羅漢寺などの景観を作ります。この2つの火山岩類が河川や風雨によって柔らかい部分を侵食され、硬い岩の部分が残って突出し、奇岩・岩峰・岩窟などを生み出しています。溪流や樹木の美しさと相まって山水画的な風景を造っています。



写1：猿飛千壺峡の甌穴群



凡例

低位段丘堆積物		tl	礫、砂及びシルト
中位段丘堆積物		lm ₂	礫、砂及びシルト
		lm ₁	
阿蘇-4火砕流堆積物		A ₄	輝石角閃石デイサイト溶結凝灰岩及び非溶結ガラス火山灰及び軽石
今市火砕流堆積物		l	輝石安山岩ーデイサイト溶結凝灰岩
耶馬溪火砕流堆積物		Yb	輝石角閃石デイサイト溶結凝灰岩及び非溶結ガラス火山灰及び軽石
新期宇佐 火山岩類	火山碎屑岩 (溶岩を伴う)	U _{3v}	安山岩ーデイサイト火山礫凝灰岩 (溶岩を伴う)、凝灰角礫岩及び凝灰岩
	溶岩	U ₃	安山岩ーデイサイト溶岩
黒法師層		Tb,Kh	砂岩、泥岩、礫岩及び凝灰岩
英彦山 火山岩類	火山碎屑岩 (溶岩を伴う)	Hv	安山岩ーデイサイト火山礫凝灰岩 (溶岩を伴う)、凝灰角礫岩及び凝灰岩
	溶岩	Ha	安山岩ーデイサイト溶岩
花崗岩Ⅱ (行物岬深成複合岩体など)		Gd ₂	細粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩ートータル岩 (弱い面構造を示す)

(参照) 産業技術総合研究所地質調査総合センター 20万分の1地質図幅「中津」クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示-改変禁止2.1 (中津市域を中心に掲載)

《図5：中津市の地質》



写2：屏風のように折り重なった競秀峰の断崖

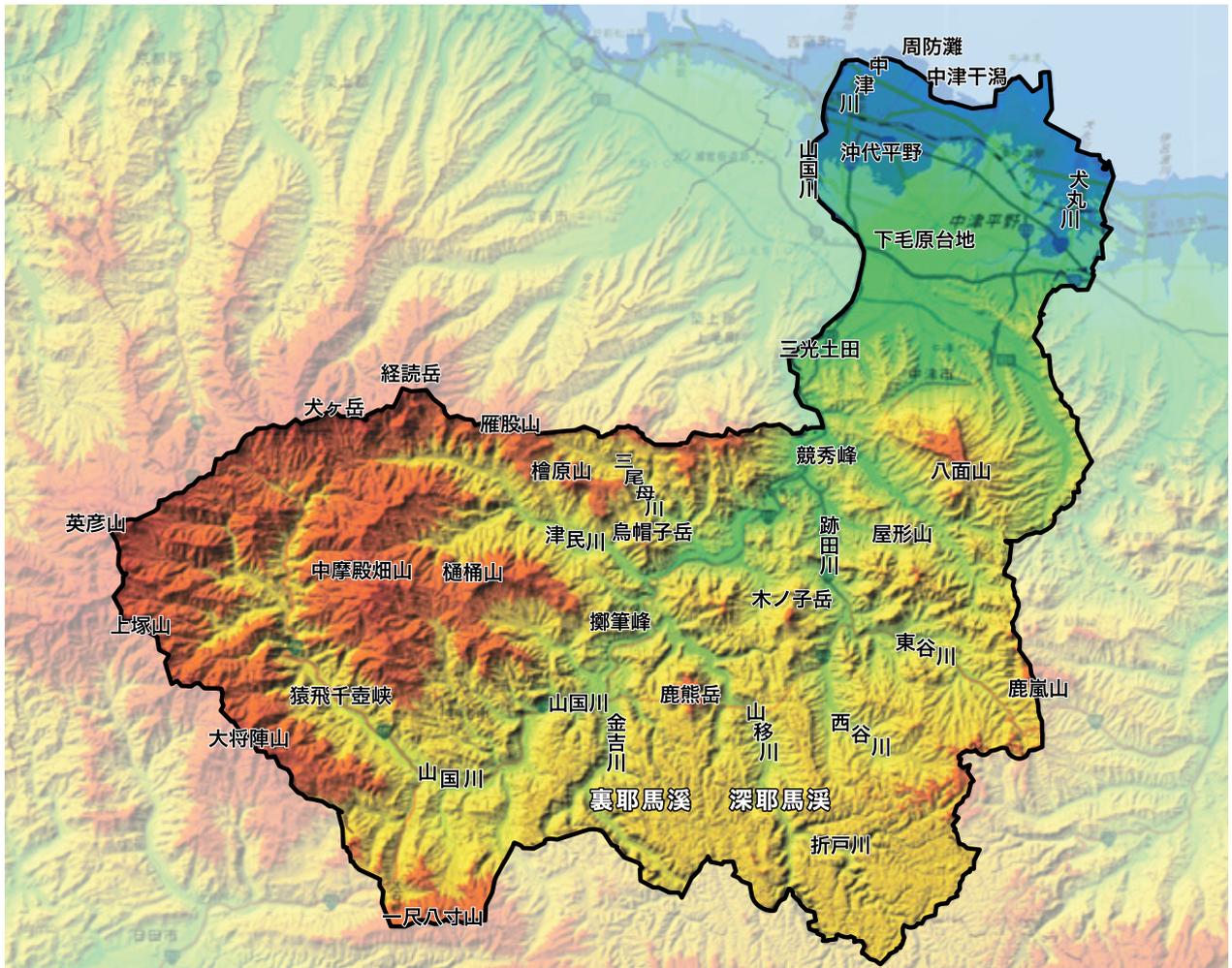
耶馬溪南部では、猪牟田カルデラ（九重山北方）を噴出源とした中部九州で最大規模の火砕流堆積物である耶馬溪火砕流堆積物（YB）が分布しており、最大150～200mの厚さの火砕流が堆積して台地を構成しています。輝石角閃石デイサイト質の溶結凝灰岩を主としており、下部堆積は非溶結岩、上部は強固に溶結して柱状節理が発達し、多数の岩柱



写3：石柱群が展開する深耶馬溪の山々

を形成しています。今市火砕流堆積物（I）も猪牟田カルデラを噴出源とし、耶馬溪火砕流堆積物を作る台地上に点在しています。深耶馬溪及び裏耶馬溪の深い峡谷と岩柱の景観は、この台地を雨や流水による浸食及び風化作用等により造り出されています。

また、一部地域で後期鮮新世（230万年前）の黒法師層（Kh）という火山碎屑物を含む湖沼性堆積物が分布します。この層からは木の葉の化石や動物の足跡化石等が見つかっています。この他、阿蘇カルデラから噴出した阿蘇4火砕流堆積物（A4）も山国川沿いの丘に点在しています。この丘は、9万年前に山国川に流れ込んだ火砕流の一部が残ったものですが、一部を残しそのほとんどがその後の雨や流水等の風化侵食川の侵食によって失われています。



《図6：中津市の地形》

山間部を抜けると洪積台地は中位段丘堆積物 (tm1、tm2) と低位段丘堆積物 (t1) から成っています。後期更新世前半 (10万年前) の海水面の上下に伴って堆積した層で、海岸段丘堆積物・河岸段丘堆積物・扇状地堆積物等に分けられます。市内では下毛原台地^{しもげぼる}や長峰原台地 (の一部)、鍋島砂丘等と呼ばれ、多くの谷が入っています。

洪積台地下部には沖積平野が広がります。三光土田から市街地の沖積平野は中津平野と呼ばれます。中津



写4：沖代平野の南東に広がる洪積台地

平野は、福岡県豊前市から大分県豊後高田市の北岸に帯状に連なった平野を指し、丘陵状の洪積台地、山地と続いています。沖積平野は、後期更新世末 (約4万年前) から現在までに堆積した層で成っており、扇状地を成し、三口を扇頂部 (海拔20m) として海岸へ緩やかに傾斜します。平野内には

山国川の旧河道の痕跡や自然堤防、微高地等が存在します。中津平野のうち沖代周辺の平野は沖代平野とも呼ばれます。

海岸部では海成堆積物から成る干潟が広がっています。山国川下流域から犬丸川下流域までの約10km、面積1,347haの中津干潟※です。日本でも有数の面積である豊前海干潟(3,323ha)はいくつかの港湾施設によって分断されており、中津干潟はその一部になります。干潮時は最大沖合約3kmに渡って出現します。小河川毎に6地域に分けられ、大新田干潟では自然の海岸が残り、干潟・砂浜・黒松等海岸の原風景が広がります。



写5：中津干潟が広がる海岸部

(参考資料)

「20万分の1地質図幅「中津」」独立行政法人 産業技術総合研究所地質調査総合センター 2009

「大分県の天然記念物(地質鉱物)天然記念物緊急調査(地質鉱物)報告書」大分県 2021

「三光村誌」三光村 1988

「中津市史」中津市 1965

「最新の地質学体系に基づく大分県北部地域の地質 ～中津・宇佐を中心とした層序学～」一般社団法人日本応用地質学会九州支部・九州応用地質学会報No.36 2015

「中津干潟レポート2013」NPO法人水辺に遊ぶ会 2014

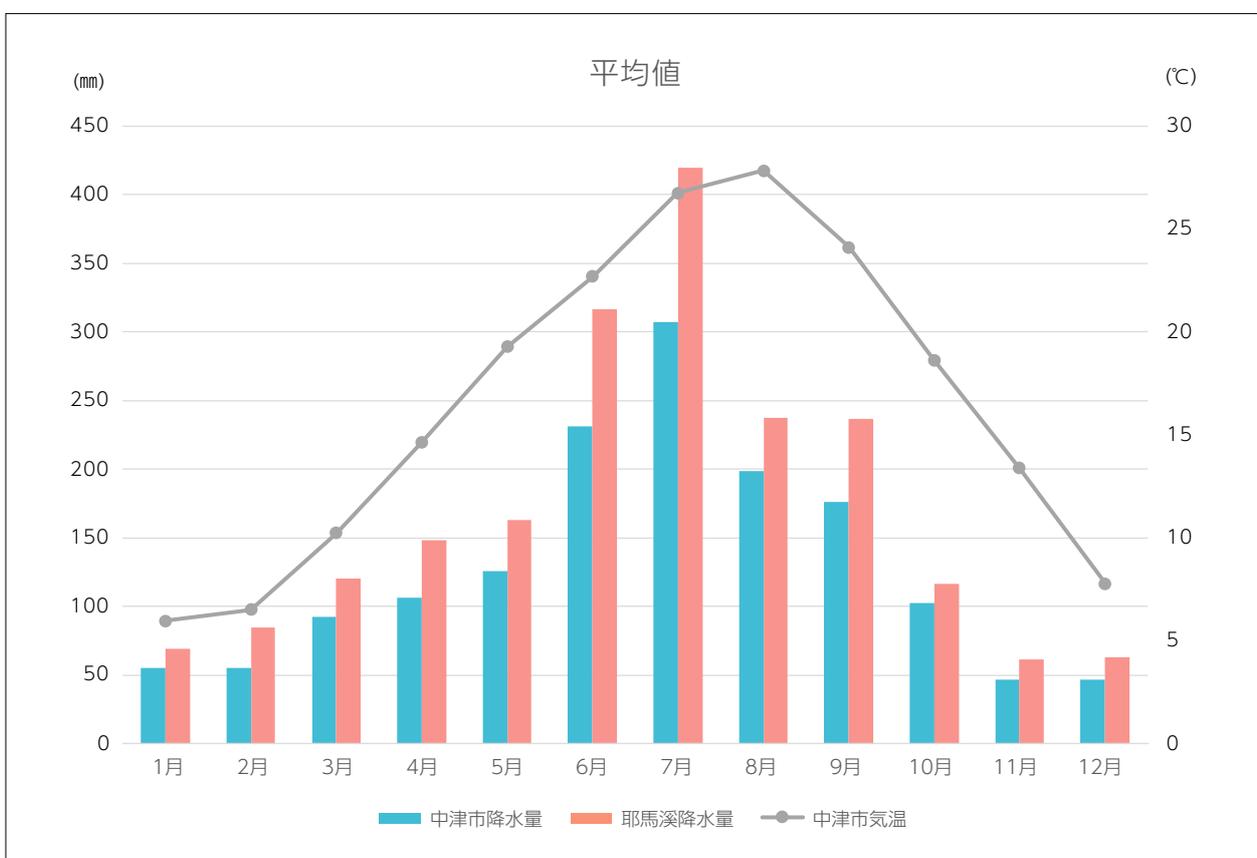
※中津干潟：「中津干潟レポート2013」によれば、「中津干潟」は最近になって使われるようになった名称であり、大分県中津市の海岸部に位置し、山国川河口から宇佐市との境界までの間に広がる干潟を指す。

(3) 気象

気候は瀬戸内海気候区に属し、年間を通じ比較的温暖です。平野部における平均気温は16.5度で、大分県のなかでは比較的気温の高い地域です。

中津市には、気象庁の2つの観測所があります。「中津観測所」では気温・風・雨量を観測し、「耶馬溪観測所」では雨量を観測しています。下記のグラフは2014年から2023年までの10年間を対象とし、雨量は中津と耶馬溪両観測所のデータを、気温については中津観測所のみデータを反映しました。

年間降水量は、中津観測所が1,546.5mm、耶馬溪観測所2,037.9mmで、山間部は平野部に比べて降水量が多く、夏季から秋季にかけては、大雨や台風の影響を受けやすく災害危険度も大きくなっています。また、冬季から春季にかけては、空気が乾燥し、季節風が強いため火災の危険度が高く、山間部では積雪、路面凍結が発生します。



中津観測所

単位°C/mm

区分	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
平均気温	5.99	6.52	10.25	14.62	19.29	22.68	26.76	27.83	24.11	18.64	13.4	7.79	16.49
降水量	55.55	55.7	92.4	106.45	125.75	231.5	307.2	199	176.25	102.45	47.1	47.15	1546.5

耶馬溪観測所

単位°C/mm

区分	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
降水量	69.7	84.9	120.2	148.05	162.85	316.9	419.6	237.7	237.1	116.75	61.4	62.75	2037.9

(参照) 気象庁気象データ

《図7： 気温と降水量の平年値（2014～2023年）》

(4) 植生・植物

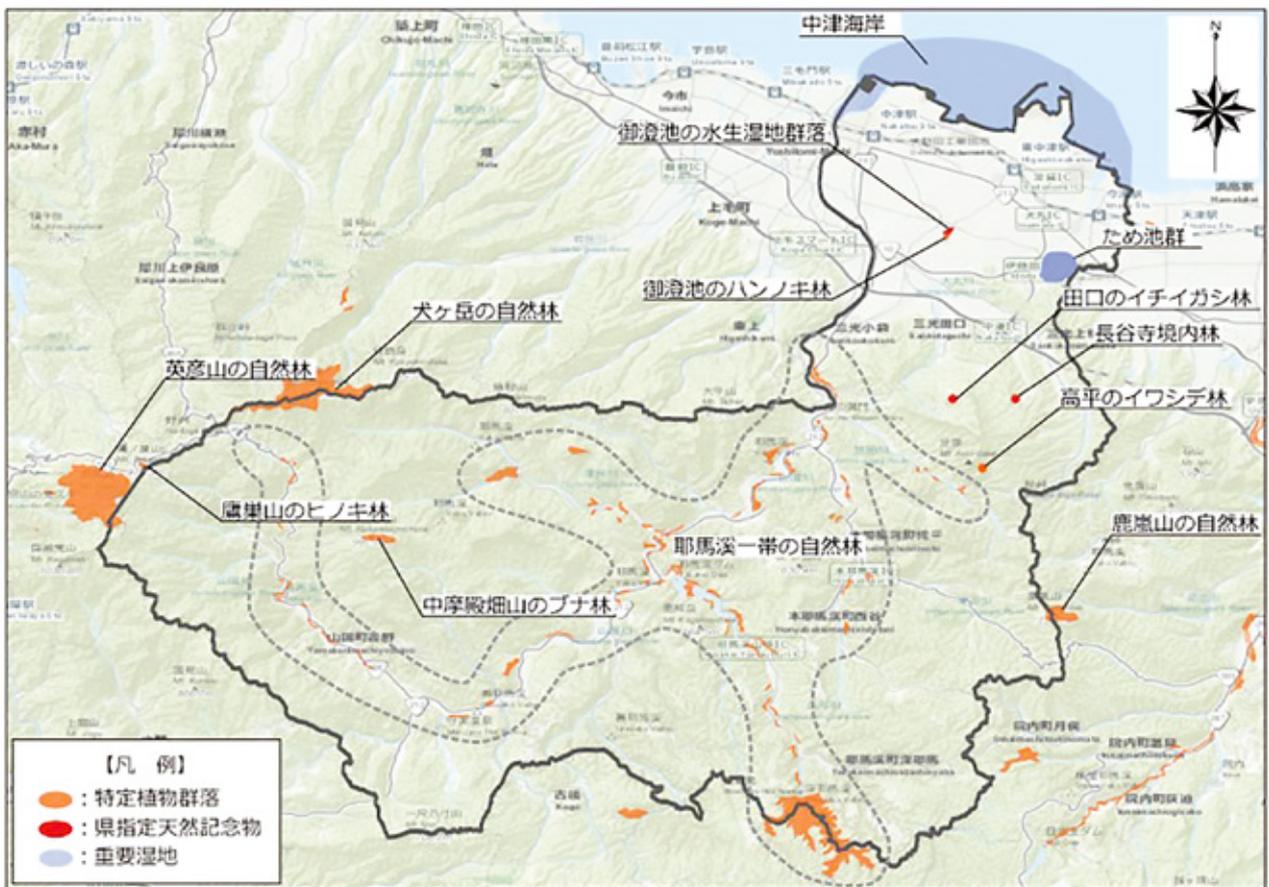
山間部の植生は、森林と溪流等の水辺の植物群に大別されます。森林には、イロハモミジやコナラ、アラカシ、アカマツなどが、岩峰と一体の景観を作っています。スギやヒノキの植林も大きな面積を占めています。水辺では、河岸の堆積地に群生するツルヨシをはじめ、溪流が急な溪谷の岩の隙間に生えるセキショウ、溪流の岸壁に着生するイワタバコなどが生息しています。

水田やため池などにはオニバス、ジュンサイ、ヒシ、ガガブタなどの水生植物群落を確認されています。薦神社の三角池に生息するマコモは、宇佐八幡神の依代として、神事に用いられてきました。

海に面した砂浜では、ハマヒルガオやハマボウフウ、河口の湿地にはハマボウやハマサジなど、多様な植物が生息しています。

重要な植物群落としては、環境省の特定植物群落である「御澄池のハンノキ林」^{かならしやま}「鹿嵐山の自然林」^{なかまとのほたやま}「耶馬溪一帯の自然林」^{なま}「中摩殿畑山のブナ林」^{なま}「犬ヶ岳の自然林」^{いぬがたけ}「鷹ノ巣山のヒノキ林」^{たかのすま}「英彦山の自然林」^{ひげ}があります。

大分県指定天然記念物には「三角池の水生・湿地群落」^{みすみいけ}「長谷寺境内林」^{ながせ}「田口のイチイガシ林」^{たのくち}「高平のイワシデ林」^{たかひら}「ブナの原生林」^{ふなの}「千本カツラ」^{せんぽん}「ゲンカイツツジ」^{げんかい}「キシツツジ」^{きし}が指定されています。



(参照)「中津市環境基本計画」中津市2019 出典：環境省自然環境 Web-GISより作成

《図8：中津市における自然環境保全上重要な地域》

(5) 動物

森林、河川、池沼、干潟など、多様な地形に恵まれた中津市には、多くの生物が生息しています。山林から農地には、鹿、猪が多く、野鳥たちの越冬の場となる森林には、ルリビタキ、ジョウビタキの群れが生息しています。水田を餌場とするタカの仲間のサシバ・オオタカなども確認できます。耶馬溪の岩角地にはクロツバメシジミ、溪流にはトンボ類が多く生息しています。下毛原台地上の「野依新池」には、種の保存法適用種の「ベッコウトンボ」（市天然）が、平野部の水田にわずかに残る土水路には、ドジョウやミナミメダカ、マツカサガイなどの希少種が確認されています。山移川を含む山国川は、魚類の餌となる水生昆虫などの底生動物が多く、ニホンウナギをはじめ、オヤニラミ、アカザなど、生息している魚類の種数が県内で最も多い河川の1つです。里山の水田や水路に生息し身近な存在だったホタルは、水田の減少や水路のコンクリート化等の環境の変化により市街地ではほとんど見られなくなりましたが、豊かな自然の残る耶馬溪には群生地が分布しています。

また、瀬戸内海最大級の干潟である「中津干潟」は、干潟の地盤高が低下したり、砂が減って泥が増えたりするなどの物理的な環境の変化により、かつては大量に採れたアサリ貝が激減するなど生態系にも大きな変化がみられますが、それでもカブトガニをはじめとする希少生物が生息し、干潟の餌を求めて集まってくるズグロカモメやクロツラヘラサギを観察することができます。国内有数の生物多様性を誇り、近年も未記載種が確認されています。希少な生き物たちの生息域として、「中津干潟」、「野依新池」などのため池群が環境省の「生物多様性保全上重要な湿地（重要湿地）」や大分県の「おおいたの重要な自然共生地域」に選定されています。



写6：中津干潟



写7：カブトガニ



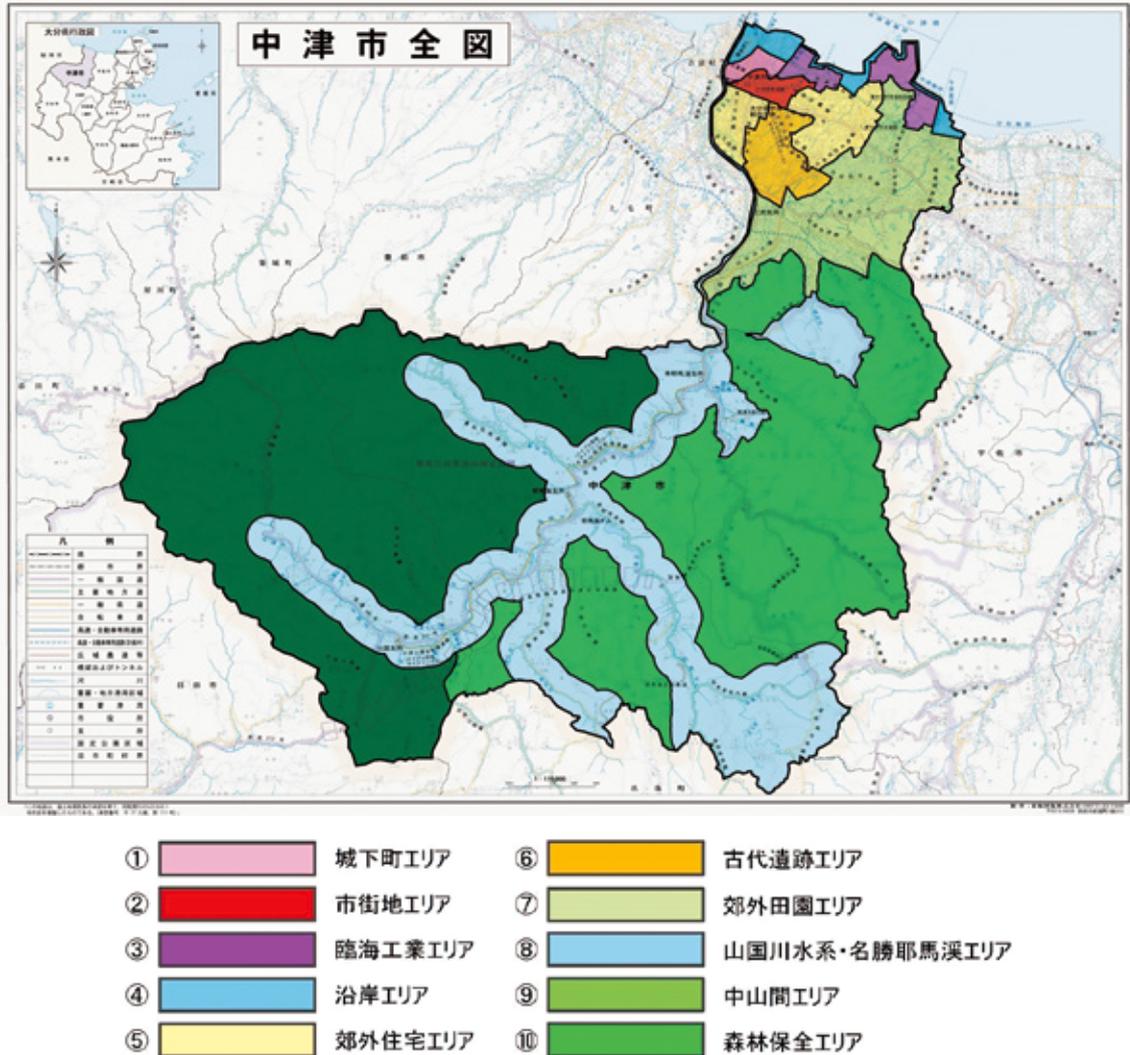
写8：野依新池



写9：ベッコウトンボ

(6) 景観

「中津市景観計画」で設定されている図9「景観特性に基づくエリア」の①～⑩を大きく「沿岸部」「沖積平野と洪積台地」「山間部」の3つに分けて概要を説明します。



(参照)「中津市景観計画」中津市2010

《図9：景観特性に基づくエリア図》

【沿岸部】

①城下町 ②市街地 ③臨海工業 ④沿岸エリア

海に面した山国川、中津川、^{かきぜ} 蛸瀬川及び犬丸川河口域に広がるエリアです。山国川下流の城下町には中津城を中心とした町割りが残り、かつての城下町の風情が感じられます。幹線道路沿いは、住宅や店舗など、伝統建築と現代建築が混在する町並みとなっています。住宅等の建て替えも顕著ですが、諸町地区や金谷地区、豊後町・蛸瀬地区などでは、今なお数多くの歴史的建造物を見るこ



写10：城下町～沿岸部の景観

とができます。海岸には「中津干潟」が広がり、昔から良好な水辺空間として人々に親しまれています。河口付近の水域には、様々な動植物を見ることができ、豊かな自然景観を形成しています。

【沖積平野と洪積台地】

⑤郊外住宅 ⑥古代遺跡 ⑦郊外田園エリア

台地上の郊外地には八面山の山裾から市街地へ田園風景が広がり、各所から八面山を眺望することができます。平野部では古代より盛んに稲作が行われ、現在も農業地帯となっています。「薦神社」(県史跡)、「長者屋敷官衙遺跡」(国史跡)、「沖代地区条里跡」など、古代遺跡が閑静な景観の中に保全されています。



写11：沖代平野の景観

【山間部】

⑧山国川水系・名勝耶馬溪 ⑨中山間 ⑩森林保全エリア

ほとんどが耶馬日田英彦山国定公園に属し、奇岩奇峰の景勝地として「耶馬溪」(国名勝)66景の内、49景が集中するエリアです。狭隘な谷間に農地や住宅地が散在し、それらが集落を形成しています。特に山国川沿いの一部地域は観光資源にも恵まれた地域です。中山間部では四季折々の自然豊かな景観を見ることができます。



写12：山間部の景観（一ツ戸城跡と集落）

(7) 災害

①豪雨災害・台風

山間部では、河川は急流かつ狭小で、集中豪雨や降水量の多い時期に鉄砲水となり、氾濫しやすくなっています。造林が推進された後、森林管理が行き届かず、雑木林が減少していることなどが土石流災害の一因となっています。近年は地球温暖化の影響で、平成24(2012)年、平成29(2017)年、令和5(2023)年と、山国川で大規模な氾濫が起き、流域に大きな被害が発生しています。また、大型台風が日本列島を襲い、各地で大規模な被害が頻発しています。台風の風は建築物に損壊を与え、高潮を引き起こし、沿岸部の標高の低い地域では浸水などの複合被害をもたらします。令和3年度に大分県が公表した「高潮浸水想定区域図」では、中津市は浸水の深さが最大6.8m、浸水継続時間が最大3日間以上と、甚大な被害が想定されています。

②山腹崩壊・がけ崩れ

山岳については、周辺に500～800m級の山地が広がり、これらの山々の間を刻む溪谷に面する山腹斜面は崖錐性堆積物等が多く、かつ斜面傾斜度が大きいいため、落石や土砂崩れが発生しやすくなっています。平成30(2018)年4月には、台地周縁部である耶馬溪町金吉地区において、先行雨量が無いにも関わらず突如として山腹崩壊が発生し、6名もの尊い命が犠牲となっています。原因は、数千年前に発生した崖錐堆積物が地下水の誘因によって再び崩壊したとされています。これら地形・地質による素因から大規模な山体崩壊の可能性が考えられます。

③地震

平成24年度大分県津波浸水予測調査・地震津波被害想定調査、平成19年度大分県地震被害想定調査に基づき、中津市内で想定される地震・津波被害の震源は、南海トラフ・中央構造線断層帯・周防灘断層群(主部)・日出生断層帯・万年山一崩平山断層帯で、最大震度は6強、最大津波高は2.91mが想定されています。

また、地震によって引き起こされる津波については、令和5年11月28日に、津波浸水範囲が津波防災地域づくりに関する法律第53条第1項に基づく「津波災害警戒区域」に指定され、中津市沿岸部の広範囲にわたって浸水の被害が想定されます。福岡県の西山断層や警固断層による地震を考慮することも必要です。

④大規模火災

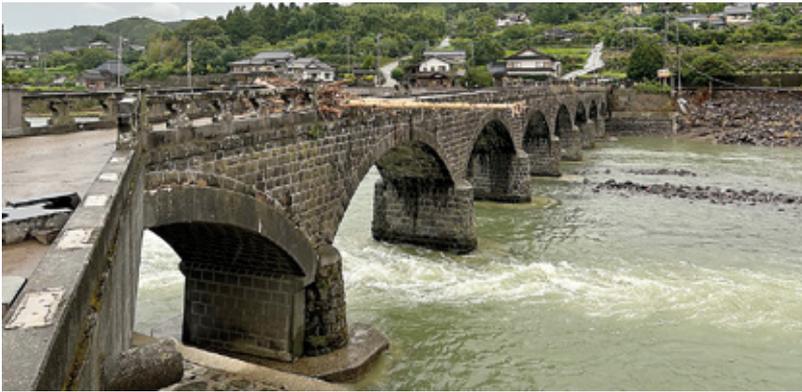
市街地部においては、地震により倒壊した建物から同時多発的に火災が起き、延焼被害が広がる可能性があります。山間部においては、冬の乾燥期などに林野火災が広がる恐れがあります。

《表1：中津市における近年の自然災害》

発生日月	名称	内容
平成24年 7月3日・14日	平成24年九州北部 豪雨災害	線状降水帯の通過により過去最大となる時間雨量91ミリを観測し、山国川が氾濫。1名が行方不明となり、477棟の住家が被害を受けた。
平成27年9月18日	チリ沖地震	津波注意報が発表されるが、観測はされてない。
平成28年1月25日	平成28年寒波	水道管の凍結により市内約6,000世帯に影響が出る。給水制限と給水所の設置を行い対応。
平成28年4月16日	熊本地震	中津市では震度4を観測、耶馬溪町深耶馬では県道に落石が発生。
平成28年6月30日	耶馬溪町鳶ノ巣山 崩落	深耶馬溪一目八景の鳶ノ巣山の石柱群の一部が剥離崩落。観光名所である景観に大きな被害。
平成28年8月25日	平成28年渇水	耶馬溪ダムの貯水率が低下したため、渇水対策本部を設置し、節水の呼びかけを実施。(最低値8/28：47.6%)
平成29年6月4日	耶馬溪町大字中畑 地区山林火災	9,400㎡を焼失、延焼範囲が広いことから、自衛隊ヘリと防災ヘリによる上空からの放水を実施。
平成29年 7月5日～8日	平成29年7月九州北 部豪雨災害	線状降水帯の発生により、大雨特別警報が発表される。山国町で大規模な土砂災害が発生する等、67棟の住家が被害。
平成30年4月11日	耶馬溪町金吉地区 山地崩壊災害	無降雨時に大規模な山地崩壊が発生、住家4棟が全壊、6名の死亡。また、復旧工事中の事故により1名殉職。
平成30年8月30日	平成30年渇水	耶馬溪ダムの貯水率が低下したため、渇水対策本部を設置し、節水の呼びかけを実施。(最低値9/6：31.6%)
令和3年1月8日	令和3年寒波	水道管の凍結により市内約1,000世帯で漏水が発生。給水制限と給水所の設置を行い対応。
令和4年 12月23日～25日	令和4年寒波	水道管の凍結により市内約1,000世帯で漏水が発生。給水制限と給水所の設置を行い対応。
令和5年 7月8日～11日	令和5年7月の梅雨 前線による豪雨災害	線状降水帯の通過により大雨特別警報発動。山国町では大規模な土砂災害が発生。101棟の住家が被害を受け1名死亡。

⑤近年の文化財被害

自然災害による文化財の被災も続いています。深耶馬溪のしんやまげい 鷲ノとびのすやま 巢山は、「耶馬溪」（国名勝）に指定された景観の1つで市を代表する観光名所ですが、平成28年6月に一部が剥離崩落したことで、景観が大きく変化し、観光面でも深刻な影響を受けています。また近年頻発する豪雨による水害では、山国川にかかる石橋が次々とき損しています。令和5年7月の豪雨では、前年に重要文化財に指定されたばかりの本耶馬溪町の「耶馬溪橋」（国重文）がき損し、長らく通行止めになっています。耶馬溪町の「長岩城跡」（県史跡）では、豪雨の際に石積み遺構の一部崩壊が認められています。



写13：耶馬溪橋被災状況



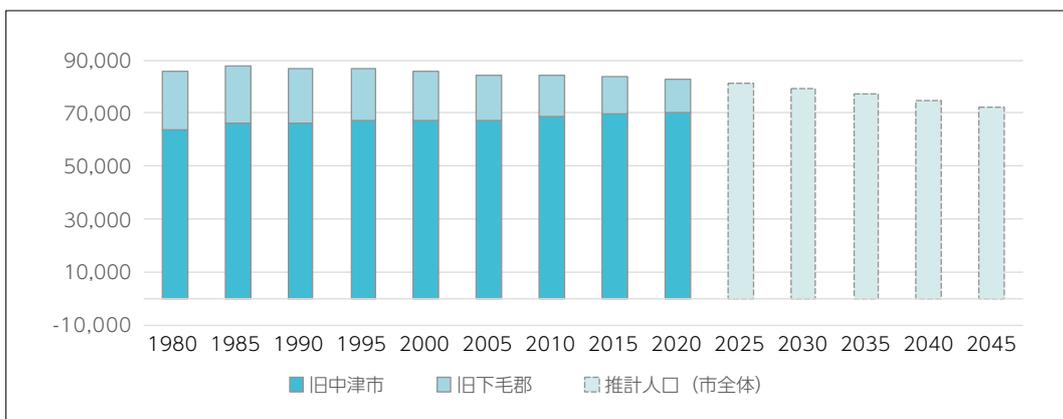
写14：鷲ノ巢山被災状況

2. 社会的状況

(1) 人口

中津市の人口は81,526人（令和6年8月15日現在）で、県内では大分市・別府市に次いで第3位の人口規模となっています。旧中津市の人口は69,499人と、平成27年の国勢調査と比較して横ばい状態である一方で、山間部である旧下毛地域（三光・本耶馬溪町・耶馬溪町・山国町）の人口は12,261人で減少が続き、市全体としては微減です。

「国立社会保障・人口問題研究所」の将来推計によると、今後も減少傾向は続き、令和12（2030）年には80,000人を割り、令和22（2040）年には75,000人を割る予想となっていますが、当該推計と比較すると減少幅が抑えられて推移している状況です。

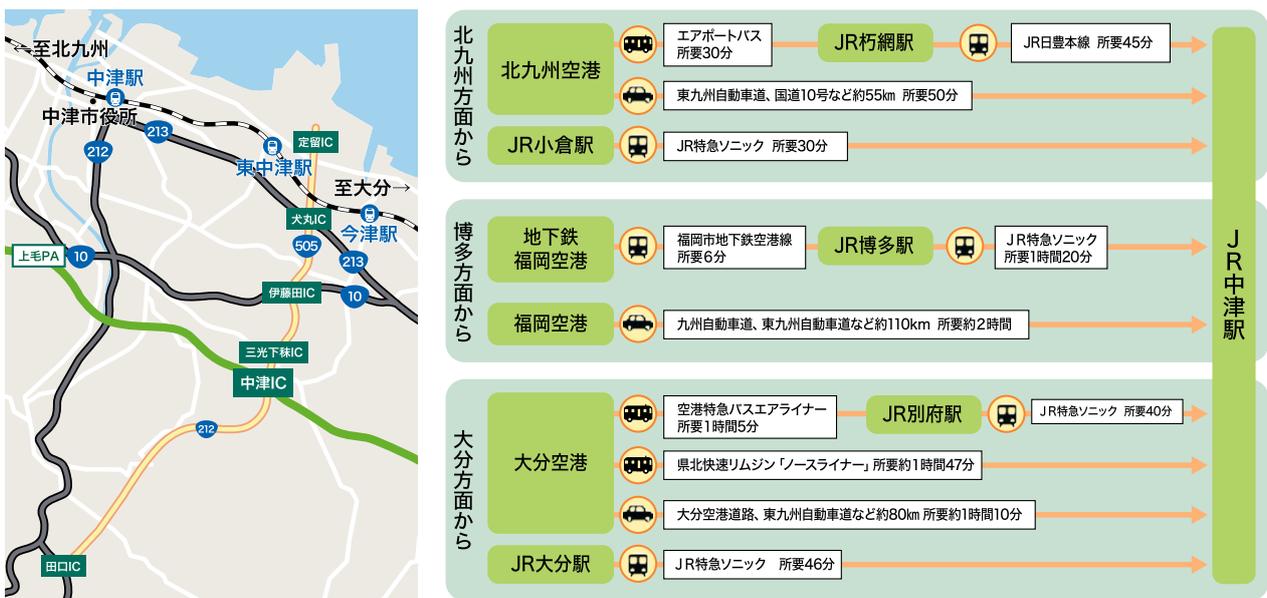


（参照）国勢調査（～2020年）、国立社会保障・人口問題研究所 H30年推計（2025年～）

《図10：中津市の将来推計人口》

(2) 交通網

中津市は、海に面する北部は東西の幅が狭く、南部は西へ大きく湾曲した形状をしています。西は福岡県に接し、東は宇佐市、南は日田市と玖珠町に接しています。主要な交通網は、市域の中核をなす北端では、JR日豊本線、国道213号線がほぼ平行して東西に走っています。また、国道10号と東九州自動車道が沿うように平行して東西に延び、JR・車利用とも、大分方面、北九州方面からアクセスしやすい環境となっています。南北方向へは、国道212号がJR中津駅付近を起点として市域を縦断して南の日田市へ続いています。現在、市域北端から東九州自動車道に連結する形で地域高規格道路「中津日田道路」が整備中で、近い将来、福岡県中部地域への玄関口となる日田市へのアクセスが改善される予定です。鉄道網の九州の玄関口であるJR小倉駅から特急で約30分、博多―大分間を走る特急列車も多く、鉄道利用は比較的アクセスしやすい地域です。しかしながら2次交通では、JR中津駅から耶馬溪方面への公共交通機関が不足している現状です。市内の移動は、公共交通としてのバスもありますが、便数が少なく、観光用の巡回バスも不足しており、住民・観光客とも、車利用が中心となっています。また山国川上下流域の観光地点を結ぶ「メイプル耶馬サイクリングロード」は、観光客の周遊手段として多くの方に利用をいただいておりますが、レンタサイクルの各貸出し拠点では、気軽に乗り捨てが出来る仕組みがまだ十分に整っていないのが現状です。現在、市内における移動手段の確保や広域交通ネットワークの整備などが進められています。



(参照) 「中津市観光振興計画」2024

《図11：中津市の交通網・アクセス状況》

(3) 産業

【農業】 平野部では古くから水田、畑地、果樹園が多く、隣接の宇佐平野とともに、県北の穀倉地帯を形成しています。中山間地域では水田が主体です。北九州市に近いことから、都市近郊農業が発展し、野菜、果樹の出荷も多く、畜産も盛んです。しかし、近年は農家数が減少しており、それに伴って農業産出額は緩やかな減少傾向にあります。

【林業】 中津市は市域の77%が森林で、スギ・ヒノキ等の人工林は、育成の時代を経て利用期を迎えています。しかし、木材価格の長期にわたる低迷等により、適切な森林管理や林業生産活動が停滞しています。このため令和元年度から経営放棄林の解消や担い手対策などの取組みを進め、林業の活性化を図っています。

【漁業】 中津市の北側に広がる中津干潟では、古くから干潟を利用した「干潟漁業」、そして干潟に続く砂質の良好な漁場では「漁船漁業」が行われています。その中でもアサリ、バカガイは、昭和60(1985)年頃は全国有数の漁獲量を誇っていました。しかし近年、環境の変化等により中津市でも漁獲量、魚価ともに低迷が続いています。現在は、干潟の環境を活かしたカキ養殖(ひがた美人)やアサリの試験養殖を進め、中津産で質の高い特徴ある産品を戦略品目としてブランド化し、付加価値を高める取組みを推進しています。

【6次産業】 平成27年度から市内の農林水産物を活かして生み出された6次産業産品を、認知度向上及び地域活性化を図ることを目的として、「なかつ6次産業推奨品」として認証し、広く市内外の消費者に対して販売及びPRをしています。地元で採れた新鮮なお茶・しいたけ・果樹や食肉などを使用して出来た加工食品や、耶馬溪の樹木から抽出した香りの商品等が認証を受けています。地産地消が推進されていく中で、生産者のこだわりを身近に味わえる地域の新たな魅力の発信素材として、今後の発展が期待されます。

【工業】 中津市は、明治・大正時代には繊維工業が盛んでしたが、近年は自動車関連企業、IC関連企業の集積が進み、平成11(1999)年、中津港が重要港湾に昇格すると、平成16年には近接した場所にダイハツ九州(株)が操業を開始しました。以降は多くの自動車関連企業が進出し、全国有数の自動車産業のまちとして発展を続けています。

【商業】 近年、卸売業での商品販売額は平成14年で下げ止まり回復傾向でしたが、平成26年で減少し、小売業の商品販売額や商店数は年々減少傾向にあります。また、大型小売店の立地動向をみると、近年は郊外部への立地が進んでいます。

土地に根付いた農業、林業、漁業といった1次産業従事者数の減少は、少子高齢化社会と深く関わり、地域に伝わる歴史文化資源の継承者数減につながります。林業の停滞は耶馬溪の景観を維持することが困難な状況と直結しています。そのような中、地域の特徴ある産品のブランド化促進は、1次産業を支え、地域を活性化させる戦略の1つとして期待されています。

(4) 観光入込客数

本市の観光入込客数は、「中津市観光振興計画 第2次『な活』観光のすゝめ」によると、平成26(2014)年はNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の影響で中津城などの旧中津城下町への観光客が増加し、観光動態調査を開始して以来、最多の約550万人となりました。その後は官兵衛ブームの終息や自然災害の影響、日韓関係の悪化による韓国人団体旅行客の減少により、令和元(2019)年には約436万人まで落ち込み、続く令和2年には新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で約282万人と大幅に減少しました。令和4年には、新型コロナワクチン接種の進展及び全国旅行支援の開始の効果などで約340万人まで回復しています。また、令和5年5月に、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、2類相当から5類に引き下げられたことから、今後さらに観光客数の増加が見込まれます。

《表2：中津市への来訪者割合》

令和4年 国内エリア別来訪者割合			令和4年 九州・沖縄エリア別来訪者割合	
大区分	中区分	令和4年	県名	割合
北海道	北海道地方	0.4%	福岡県	57.4%
本州	東北地方	0.0%	佐賀県	3.5%
	関東地方	14.3%	長崎県	2.1%
	中部地方	4.5%	熊本県	3.5%
	近畿地方	9.9%	大分県	31.9%
	中国地方	6.7%	宮崎県	0.0%
四国	四国地方	0.9%	鹿児島県	0.7%
九州・沖縄	九州・沖縄地方	63.2%	沖縄県	0.7%
合計		100.0%	合計	100.0%

市内12カ所設置のアンケート結果(回答数223人)

さらに、令和4年10月の水際対策緩和を受け、台湾や韓国、香港からの外国人旅行客が継続的に増加しています。耶馬溪エリアを中心とした自然景観や歴史的観光スポットの周遊、サイクリング、ゴルフなどのアクティビティを目的としたインバウンド需要が復活の傾向にあります。

交通面では、福岡空港や北九州空港、大分空港の近隣空港からのアクセスに恵まれており、九州以外のエリアからも多くの観光客にお越しいただいています。九州各県からは、隣県である福岡県からが最も多い状況です。自動車利用の日帰り客の割合が多く、通過型観光になっているという現状があります。今後は東九州自動車道4車線化や中津日田道路の順次開通に伴い、都市圏からの更なる観光客増加が見込めると共に、中津港から耶馬溪までのアクセスが改善されることで、クルーズ船の乗客による市内日帰り旅行者の増加も期待されます。中津観光を楽しんでいただくさらなる対策が求められています。

宿泊の面では、中津駅周辺にビジネスホテルは充実していますが、修学旅行などの団体客の受け入れが難しいのが現状です。平成30(2018)年から市内で農家民泊が開始されたものの、事業者数はまだまだ不足しています。今後は宿泊施設の整備や魅力的な体験プランの提供などを通して、いかに通過型観光から滞在型観光へ転化させていくかが課題です。

(5) 博物館・資料館・史跡公園・収蔵庫等の文化財関係施設

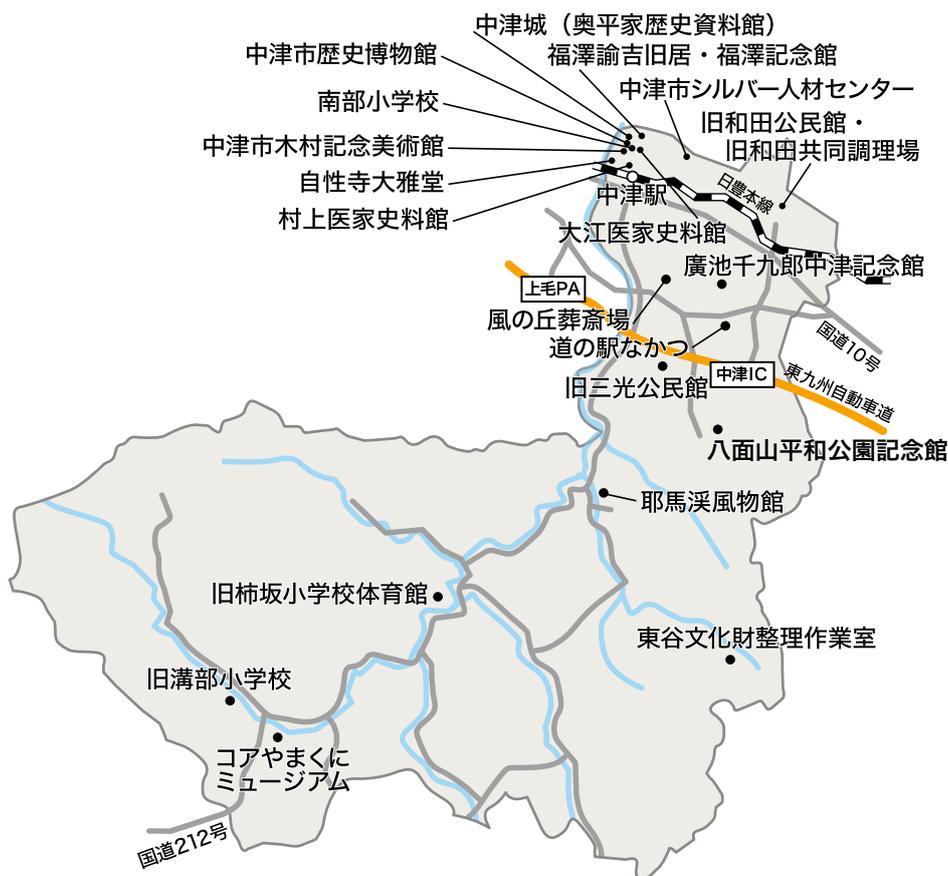
中津市内には、歴史資料を収蔵・展示する施設及び史跡公園等として、以下のものがあります。

《表3：中津市の文化財関係施設》

	施設名	所管	内容
博物館及び類似する展示・収蔵施設	中津市歴史博物館	市	中津市の歴史文化を展示する中核施設。文献資料・美術工芸品・民具・埋蔵文化財等、展示・収蔵管理。
	福澤諭吉旧居・福澤記念館※	市	福澤旧邸保存会が管理。福澤諭吉関係資料を収蔵・展示。
	村上医家史料館(市史跡)	市	中津藩医村上家の建物と所蔵品収蔵・展示。
	大江医家史料館(市有形)	市	中津藩医大江家の建物と所蔵品収蔵・展示。
	中津市木村記念美術館	市	中山忠彦の絵画・近世・近代の絵画・茶器等を収蔵展示。
	耶馬溪風物館	市	耶馬溪地域の文化財を展示。耶馬溪関係の資料を収蔵。日本遺産ガイドセンター。
	コアやまくにミュージアム	市	複合文化施設「コアやまくに」内の展示施設。山国町の民具などが常設展示されている。
	中津城(奥平家歴史資料館)	民間	中津城模擬天守閣に奥平家の資料を収蔵・展示。
	自性寺大雅堂	民間	池大雅の書画(県有形)、寺宝を収蔵・展示。
	廣池千九郎中津記念館		モラロジー研究所創立者の廣池千九郎関係資料を展示。
展示コーナー	相原山首遺跡展示コーナー(風の丘葬斎場)	市	「風の丘葬斎場」の待合室で、出土遺物を展示。
	法垣遺跡展示コーナー(道の駅なかつ)	市	道の駅なかつの情報休憩室で法垣遺跡(県史跡)の遺物を中心に展示。
埋蔵文化財・民具収蔵施設	南部小学校(空き教室)	市	民具・木村記念美術館所蔵の絵画等を収蔵。
	東谷文化財整理作業室	市	埋蔵文化財出土遺物と民具を収蔵。現在他所へ集約中。
	中津市シルバー人材センター	市	民具を収蔵。
	旧和田公民館・旧和田共同調理場	市	埋蔵文化財出土遺物を収蔵。埋蔵文化財整理作業場所。
	旧三光公民館	市	埋蔵文化財出土遺物を収蔵。
	旧柿坂小学校体育館	市	埋蔵文化財出土遺物を収蔵。
整備公開している施設	旧溝部小学校	市	民具を収蔵。
	南部まちなみ交流館(市有形)	市	江戸時代の商家跡を無料休憩場所として整備・公開。民間企画の展示開催。
	金谷口城戸口広場(市史跡おかい山)	市	中津城下町を巡る土塁の城戸口を広場整備。
	金谷上ノ丁文化交流広場	市	金谷武家屋敷にある作家獅子文六の父親の宅跡で、門・塀・庭園跡が残されている。

整備公開している施設	自性寺おかこい山 (県史跡)	民間	中津城下町を巡る土塁の城戸口部分を市が整備、土塁部分を所有者が整備して公開。
	鷹匠町おかこい山 (県史跡)	市	鷹匠町に残る中津城下町を巡る土塁を広場整備。
	三ノ丁おかこい山 (市史跡)	市	三ノ丁に残る中津城下町を巡る土塁を公開。
	しょうだもん 生田門 (市有形)	市	南部小学校敷地内に残る家老屋敷の門を同敷地内で移転して整備。小学校の校門として利用。
	相原山首遺跡 (県史跡)	市	「風の丘葬斎場」敷地内に、墳墓群を復元整備。
	法垣遺跡 (県史跡)	市	「道の駅なかつ」敷地内に法垣遺跡の一部を復元整備。
	沖代地区条里跡 (未指定)	市	沖代地区条里跡を見渡す高台に展望台を設置し、条里の価値や条里内の土水路の希少生物を紹介。
	長者屋敷官衙遺跡 (国史跡)	市	下毛郡衛正倉跡である史跡長者屋敷官衙遺跡を、史跡公園「なかつ長者伝説公園」として現在整備中。

※福澤諭吉の名前は「福澤」と表記するが、史跡名は「福沢」が用いられている。「福澤諭吉旧居・福澤記念館」は「福澤」である。本計画では、史跡名の場合「福沢」を、それ以外は「福澤」と表記する。



《図12：文化財の展示・収蔵施設位置図》

表3の「博物館及び類似する展示・収蔵施設」「展示コーナー」「埋蔵文化財・民具収蔵施設」を掲載

3. 歴史的背景

(1) 原始(旧石器時代～古墳時代)

中津市域では、約2万年前の旧石器時代から人々の生活が始まりました。「諸田遺跡」や「法垣遺跡」(県史跡)など台地上の遺跡で石器が少数出土していますが、明確な集落跡は確認されていません。縄文時代の遺跡はいくつも見つかっています。後期には台地上や低丘陵上に貝塚を伴う集落がいくつか形成されます。犬丸川沿いの「棒垣遺跡」(県史跡)では、内陸部にも関わらず海に生息するハマグリやツメタガイなどが出土したことから、当時、周辺は砂泥底の入江であったことが分かります。他の内陸部の貝塚でも同様に鹹水性の貝類が確認できます。晩期になると海岸線が後退し、扇状地や谷底平野などの低地にも遺跡が出土します。

縄文時代の終わり頃、九州北部に稲作文化が伝わりました。弥生時代の始まりです。市域でも屋形川沿いで弥生時代前期の集落が確認されています。中期になると、山国川下流域、犬丸川中流域の自然堤防・台地上に集落・墓地が営まれたことが、遺跡として確認されます。耕地拡大と人口の増加がうかがえます。後期には、山国川に面する台地の縁辺部が墓域となり、以後この台地縁辺部は古墳時代、古代まで伝統的な墓域として続いていきます。「相原山首遺跡」(県史跡)では、「風の丘斎場」の一角に、弥生時代の土壙墓から古墳時代、古代までの墓が復元整備されています。

古墳時代には、大型の古墳はあまり確認されていません。このことから、当地の古墳に埋葬された人々は、地域の盟主となるような首長層は少なく、小地域の有力者が多かったと考えられます。また、古墳時代後半には、台地・丘陵斜面に横穴墓が多く築かれるようになります。横穴墓は、有力農民層の家族墓として築造され、7世紀を通じて追葬が行われました。

また、古墳時代は、渡来系技術の導入によって人々の生活様式に大きな変化があった時代でした。人々の住む住居には炉に代わってカマドが築かれ、オンドル※を持つ住居も散見されます。6世紀後半には集落が増加し、沿岸部の台地上にタコツボ漁の集落が現れます。「諸田遺跡」や「定留遺跡」では、飯蛸のタコツボを焼成する穴や作業小屋と想定される堅穴が発見されており、住居跡や溝跡からは多量のタコツボが出土しています。現代の飯蛸漁で使用されるタコツボとほとんど変わらない形状です。この頃、九州でも有数の規模を誇る須恵器窯「野依・伊藤田窯跡群」で須恵器の生産が始まり、奈良時代まで操業が続きます。窯跡の近くでは「伊藤田田中遺跡」で7世紀後半、製鉄の操業が始まっています。一帯は、工業生産の一大拠点となっていました。

※オンドル：堅穴住居跡の室内の壁沿いに造った煙道に、カマドからの煙を巡らせ床下暖房のようにしたオンドル状遺構。朝鮮半島由来の暖房施設といわれる。

(2) 古代・中世(飛鳥時代～戦国時代)

大化の改新から大宝律令施行に至って、律令国家が建設され地方行政の仕組みも整えられました。豊前国は企救郡・田川郡・仲津郡・京都郡・築城郡・上毛郡・下毛郡・宇佐郡の行政区に編成されました。中津市域は、下毛郡に属し、郡役所である下毛郡衙が置かれました。「長者屋敷官衙遺跡」(国史跡)で田租(米)などを収めた正倉跡が見つかっています。遺構からは炭化した木材や米が大量に出土することから、正倉火災※にあって消失していることがわかります。また、周辺では、面積約230㎡の四面廂大型建物の遺構も見つかっています。かつての在り地首長ら有力者が郡司に任命されており、下毛郡では「擬少領勇山伎美麻呂」「擬大領葦野勝宮守」の名が残っています。彼らは、「勇山=諫山」

や「蕨野」といった地名を名字に冠する、在地の有力者でした。仏教が伝来し地方にも伝播すると、郡司ら有力者は寺をつくり、火葬も始まりました。「相原廃寺」（県史跡）や「塔ノ熊廃寺」は、7世紀後半から8世紀の古代寺院跡です。官道である豊前道は、「豊前国府」（福岡県史跡）から南下し、山国川を渡り、下毛郡から宇佐郡へ延びる直線道でした。この官道は、宇佐八幡の祖宮である「薦神社」（県史跡）の古代からの「三角池」（県史跡）の堤防を通り、「薦神社」から直線距離で16キロ先の宇佐神宮に到達します。官道を基軸として、北側の沖代平野には条里プラン※が施行され、条里水田（現：沖代地区条里跡）が開発されました。条里水田は、山国川に設けられた大井手堰から灌漑されました。井堰を造る際、人柱になったとされる母子の霊を慰め、豊作を祈る「鶴市傘鉾神事」（県無民）は現在も盛大に執り行われています。

この「沖代地区条里跡」を中心に、中世の下毛郡には多くの荘園があり、人々の暮らしが営まれていました。下毛郡の荘園の大部分が宇佐宮領でした。12世紀に成立した「八幡宇佐宮神領大鏡」によれば、宇佐八幡宮の神領のうち、下毛郡には古代の郷が荘園となった大家郷、野仲郷と深水荘が認められます。大家郷は中津市域の北西部、野仲郷は東部にあたります。それぞれ年貢の収取単位である「名」が設定されて、名主百姓が経営し年貢を負担しました。現在も荘園や名に由来する地名が小字や地域の通称地名に多く残っています。中世の有力者の屋敷跡からは中国から輸入された白磁や青磁、合子などの高級品が出土し、名主層の繁栄がうかがえます。

鎌倉幕府が開かれると、御家人であった武士は守護・地頭という職を得て地方に進出しました。豊前国には宇都宮氏が下り、一族が荘園の地頭職などを掌握して根を広げました。宇佐宮領内に荘官として土着した神官も武士化し、土地を私有化しました。彼らは、拠点の地名を名字に冠し、在地領主（国人・土豪）として成長しました。

周防・長門の守護大名である大内氏は、豊前守護職を得て領国支配を広げ、戦国大名へと成長しました。下毛郡の国人・土豪はその被官として体制に組み込まれましたが、豊後の大友氏が勢力を広げ、大内氏と豊前の支配権をめぐる争いを続けたことなどを背景に、次第に戦国領主として独立していきました。特に「長岩城」（県史跡）の野仲鎮兼は下毛郡統一に乗り出し、周辺の諸将と幾度も戦いました。豊後国との境にある下毛郡は県内でも中世城館が多い地域です。特に平地城館が多く、平山城、山城なども確認されています。

また、平安時代以降の天台宗の山岳仏教や末法思想の広がりにより、英彦山を中心にした彦山六峰※は、中世にかけて、山岳修験の場として信仰を集めていきます。彦山六峰の1つ、中津市檜原山では、鎌倉時代に始まったとされる「檜原マツ」※（県無民）が催され、彦山六峰で実施されていた松会行事を今に伝えています。市内全域で奉納される「豊前神楽」（国無民）に伝わる湯立神楽には、松会からの影響が伺えます。鎌倉時代以降、武士を中心に受容された禅宗も展開しました。特に、耶馬溪の奇岩・岩窟を中国天台山に見立てて建立された「羅漢寺」は、下毛郡のみならず全国から信仰を集め、羅漢信仰の聖地となりました。

※正倉火災：8世紀後半以降、各地で正倉火災がおき、「神火」として神による祟りであると考えられた。実際は、役人の不正隠蔽の目的や権力抗争による放火であったとされている。

※条里プラン：条里地割と条里呼称法の両者、およびそれらが一体となった実体としての土地表記システムの呼称。土地が一辺109mの正方形に区割りされている。

※彦山六峰：福岡県にある英彦山、求菩提山、蔵持山、福智山、宝珠山と、大分県中津市の檜原山。

※「檜原山正平寺」では、「檜原まつ」と表しているが、本計画では指定名称の場合は「檜原マツ」を採用。

(3) 近世(安土桃山時代～江戸時代)

天正15(1587)年、豊臣秀吉が九州を平定しました。その軍師を務めた黒田官兵衛孝高は、豊前国のうち、企救郡・田川郡を除く6郡を与えられ、天正16年に「中津城」(県史跡)を築城し初代城主となりました。黒田氏の入部に際しては、豊前の国人・土豪が旧領主の宇都宮氏を盟主に一揆を起こして抵抗しました。辛くも一揆を抑えた黒田氏は最後まで抵抗した宇都宮氏を滅ぼし領内を平定します。以降、豊前中津が統治の中心地となりました。2代長政が関ヶ原の戦功により筑前52万石を与えられ、福岡に移るまでの13年間、黒田氏の統治は続きました。

黒田氏に代わって慶長5(1600)年に入部したのが細川氏です。村支配の体制を確立させるなど、その後の政治の基礎を整えました。また、本城を小倉に定めた後も「中津城」は維持し、山国川の治水工事や城下町の整備などの土木事業に取り組み、領内の神社仏閣の再興にも力を注ぎました。細川氏は寛永9(1632)年に肥後国へ転封となり、代わって小笠原氏4家が入部しました。分割された旧細川領のうち、中津領に入ったのは小笠原長次で、その後の中津藩の形が成立しました。長次は細川氏の政策を引き継ぎ、領内の寺社の再興、城下町の整備や九州最古の上水道「御水道」の敷設も行いました。

小笠原氏の後、享保2(1717)年より中津を治めることになった奥平氏は、治安や秩序を維持するため藩士の身分の制定や掟の発布を行いました。城下では計画的な町づくりが行われ、交通網も発達しました。伝統的な漢学を学ぶ藩校が設立されるとともに、藩主により蘭学が奨励されるなど学問が発展しました。3代昌鹿は、藩医の前野良沢に蘭学を学ばせ、良沢は杉田玄白らとともに解剖学書『ターヘル・アナトミア』を翻訳し『解体新書』を完成させました。5代昌高も蘭学に傾倒し、彼の主導で編纂されたオランダ語の辞書『蘭語訳撰』(市有文)、『バスタールド辞書』はその後の西洋文化・科学の導入に貢献しました。寛政2(1790)年創設の藩校「進脩館」(市史跡)は、倉成龍渚らを師に迎え、漢学・国学・蘭学などの学問や、剣術・鎗術といった武芸を教授し、藩医として人体解剖を行った村上玄水や、福澤諭吉の師となる白石照山ら、近代化に関わる多くの人材を育てました。

発展した城下町は惣町と称され、独立性の強い自治組織があり、月番で取り仕切る町年寄には警察権も与えられていました。城下町には大工や木挽、桶屋、鍛冶師など多くの職人がおり、彼らは藩によって労働時間や賃金が定められていました。中津城下では祇園祭(現在の「中津祇園」(県無民))が町民に親しまれ、質素儉約を基本としていた奥平氏の治世でも盛大に行われました。奥平氏は、その後幕末までの150年間、中津を治めました。

(4) 近代(明治時代～第二次世界大戦前)

ペリー来航以後、外患への危機感から中津藩では砲術や医学を学ぶため、長崎・江戸への留学が進められました。一方で、藩校「進脩館」(市史跡)では上士子弟が学び、下士は私塾に通うなど、上士下士間の分断が進みました。福澤諭吉は下士の生れでありながら、長崎や大坂で蘭学を学ぶ機会を得て、中津藩江戸藩邸蘭学教授に推薦されました。その後、国際的に通用する英学へと転向し、幕府の遣米・遣欧使節団に同行した諭吉は、西洋近代文明、特に社会制度への見識を深めます。明治4(1871)年には諭吉の提言を受けて、慶應義塾の姉妹校というべき中津市学校が設立されました。諭吉の著書として有名な『学問のすゝめ』(初編)は、中津市学校開設の際、中津の人々へ新しい学問を説くため記されたものです。

幕末の中津藩は、開明派の伊達宗城の子の昌邁^{まさゆき}を藩主の奥平家の養子に迎え開国路線に傾く一方で、国学の影響を受けた勤王の志士たちが木ノ子岳や御許山^{おもとさん}（宇佐市）で拳兵するなど、下士を中心に尊皇攘夷運動も盛んでした。明治維新を迎えると、奥平昌邁は版籍を奉還し、中津城を廃城しました。明治4年の廃藩置県により中津藩は中津県となり、のち小倉県、福岡県、大分県と行政区が変遷しました。

また、西南戦争に中津隊を率いて参戦した増田宋太郎は、県下初の新聞である『田舎新聞』の発行を主導した人物の一人で、その根底には自由民権思想に基づく新政府批判がありました。増田宋太郎の妻シカは工女として富岡製糸場に留学し、製糸技術を学び中津に伝えました。中津では旧士族救済のため、士族授産として養蚕業が推進されました。大分県下の製糸工業の始まりとされる末広会社が三ノ丁に、その後中津紡績株式会社が設立されたことで機械化された工業が本格的に中津に導入されました。

明治11（1878）年に制定された「郡区町村編成法」により、下毛郡は中津町と64村に編成され下毛郡役所が設置されました。明治21（1888）年の町村制により合併が行われ1町（中津町）25村に、大正14年には大江村と豊田村が中津町に編入され、昭和4（1929）年4月1日には小楠村が中津町に編入されて、同年4月20日、市政が施行されて中津町は中津市となりました。その後、昭和18年に鶴居村と大幡村と如水村が中津市に編入、昭和26年には三保村、昭和29年には和田村、昭和30年には今津町（昭和15年、新昭村が今津町に改称）が中津市に編入されました。

この間、交通網が大きく発達します。明治24（1891）年に耶馬溪町と玖珠町をつなぐ道路が開削され、大正2（1913）年には中津駅から耶馬溪に人や物資を運ぶ耶馬溪鉄道が開通しました。川にはいくつもの石橋がかけられ、昭和の初めには、耶馬溪は多くの人々が訪れる観光地として知られるようになりました。耶馬溪の柿を使った「巻柿」や、城下町の「丸ぼうろ」「ういろう」「けんちん」等といった、今も愛されるお菓子は、中津・耶馬溪観光の土産品として人気を博しました。

(5) 現代（第二次世界大戦後～）

戦時中の中津市は、空襲に備え、市の中心部の建物疎開が行われましたが、幸い空襲を受けることなく都市機能が大きく失われることはありませんでした。

戦後は、復員者や大都市の荒廃で人々が帰郷し、急激に人口が増え食料が不足しましたが、農地改革が実施され食料生産は立ち直りました。産業面では鉄鋼関連の会社がつくられ、自動車工業の会社も海浜部を中心に進出してきました。その反面、戦前から中津の代表的産業であった繊維工業は衰退していきました。昭和60（1985）年に富士紡中津工場が全焼したのを境に、繊維工業は中津市から撤退しました。商業面では県外から大型店や複合商業施設などの進出が始まり、中津市は県北の商業の中心となっています。

交通面では、自動車の普及に伴い、昭和50（1975）年に耶馬溪鉄道が惜しまれつつ姿を消しました。昭和52（1977）年には中津駅の高架化が完成し、駅周辺の都市計画道路の整備も進みました。国道10号バイパスが平成8（1996）年に開通し、さらに、並行して走る東九州自動車道で平成28（2016）年に北九州市～宮崎市間が開通しました。中津日田道路も整備が進み、部分的に通行ができるようになってきています。

平成17（2005）年3月には、中津市、三光村、本耶馬溪町、耶馬溪町、山国町が合併し、現在の中津市が誕生しました。

合併後の中津市は、南北に長い自治体となり、人口が集中する山国川河口の旧中津市が市の北端になりました。中津駅や官公庁、商店街がある旧中津市の庁舎が新中津市の市役所本庁として、そのほとんどが山間部である4つの旧町村の旧庁舎は支所として位置付けられています。



《図13：中津市の地域区分》